

【報 告】

児童福祉コースによる地域連携プロジェクトの取り組み ～ マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり2～

令和2（2020）年度～和洋女子大学教育振興支援助成中間報告

弓削田綾乃、丸谷充子、大沼良子、庄司妃佐、佐藤有香、
二宮祐子、池谷真梨子、飯村愛

Report on Regional Collaboration Project

～ Constructing a platform collaborated the community by using multimedia : Part 2～

YUGETA Ayano, MARUYA Mitsuko, ONUMA Yoshiko, SHOJI Hisa,
SATO Yuka, NINOMIYA Yuko, IKEYA Mariko, IIMURA Ai

要旨

本稿は、2020年度から3年計画で進めている児童福祉コースの取り組みについての経過報告である。設置4年目を迎えた児童福祉コースは、保育・福祉・家政の専門性をそなえた保育士養成を一貫して目指してきた。本研究は、地域の未就学児・保護者たちと学生とが交流する場を設定・実践し、その成果と課題を検証するものである。その目的として、以下の2つがあげられる。

1つ目は、和洋女子大学を拠点とした未就学児と保護者たちの交流の場を形成するための介入について探る。2つ目は、地域の親子との交流活動が、保育士の学びにどのように影響するかを探る。

主に7・8月に実施した交流イベントについて、保護者アンケートと学生の振り返りをまとめる。これによって、地域社会への貢献を目指すとともに、保育士養成における有意義な取り組みとはどのようなものがあるのかを考えていく。

キーワード：家政福祉、保育士養成、地域交流の場づくり、あそぼう・はなそう会

1. はじめに

和洋女子大学家政学部家政福祉学科に児童福祉コースが設置されて、2022年度で4年目を迎えた。児童福祉コースでは、保育・福祉・家政の専門性をそなえた保育士の養成を目指し、家政福祉の学びと保育士養成とを有機的につなげる模索を続けてきた。その一つとして2020年度から取り組んできたのが本プロジェクトで、目指したのは、児童福祉コースをプラットフォームとした交流の場づくりである。立案にあたって重視した点として、学生の主体性、科目間の連携、創造的活動、地域の方々との交流等があげられる。

『和洋女子大学紀要 第63集』（2022年3月）では、プロジェクトの概要（理念・目標・方法と教育的効果）と、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響を受けた1・2年目の取り組みについて、授業の事例を提示しながら報告した¹⁾。本稿では、中間報告の第2弾として、2022年度にようやく実現できた地域交

流活動に焦点をあてて整理し、報告したい。なお、本プロジェクトは、和洋女子大学2022年度教育振興支援助成を受けて実施している。

2. 地域交流活動の概要

2022年7月2日（土）と8月20日（土）に、家政福祉学科児童福祉コースによる地域交流イベント「あそぼう・はなそう会」を開催した。これは、3歳以上児とその保護者を主たる対象とした子育て支援のイベントである。第1回（7月2日）は、2つの授業「保育者論」と「子育て支援」の一環として位置づけ、履修学年である4年生が主担当として取り組んだ。一方、第2回（8月20日）は、2・3・4年生から希望者を募り、実施した。

活動のねらいは、学生主体で地域の未就学児・保護者らと交流する場を準備して実施し、一連のプロセスの成果と課題を検証することであった。具体的には、以下の2つがあげられる。

1つ目は、和洋女子大学を拠点とした未就学児と保護者らの交流の場を形成するために、保育を学ぶ学生や教員らがどのように介入していくことが望ましいのかを探る。2つ目は、地域の親子との交流活動が、保育士の学びにどのように影響するかを探る。親子と直接関わる体験は通常の実習では得難いものであり、保育士養成のプロセスにおいて重要な体験になることが予測された。これらによって、地域社会への貢献を目指すとともに、保育士養成における有意義な取り組みとはどのようなものがあるのかを考えていった。

参加（未就学児と保護者）は予約制とし、募集は、和洋女子大学のホームページや、市川市子育て支援課、地域の子育て支援事業者の協力を仰いで実施した。なお、感染症対策として、事前の健康観察、受け付け時の検温と手指消毒、子ども用マスクの配布、玩具・用具等のこまめな消毒と換気などを行った。また、当日は学内の保健センターの支援を仰ぐとともに、学外参加者対象の短期保険に加入し、傷病発生に備えた。さらに、大学への諸届、駐車場利用希望者への手配、待機場所の手配等は、児童福祉コースの教員・助手が担った。

本稿では、イベント時の記録と、参加者の感想（保護者アンケートと学生の振り返り）をもとに、状況を報告したい。なお、記録と感想の収集は、いずれも和洋女子大学の倫理規定に基づく同意を得てから実施した（人を対象とする研究審査承認番号：2212）。

3. 地域交流活動① 7月2日（土）2部制「親子で参加 あそぼう・はなそう会」

3-1. 活動の概要

- ・実施時期：2022年7月2日（土）午前の部10:00～11:30、午後の部13:30～15:00
- ・実施場所：和洋女子大学南館プレイルーム、家政福祉演習室
- ・時間：各1時間30分程度
- ・参加者：

学生：和洋女子大学家政学部家政福祉学科児童福祉コース4年生 19人（実習中を除く全員）

一般の方：和洋女子大学近在の未就学児（3歳以上児とその弟妹）と保護者（内訳は表1の通り）

午前の部 7家族（未就学児12人＋保護者8人＝計20人）

午後の部 7家族（未就学児10人＋保護者12人＝計22人）

表1. 7/2「親子で参加 あそぼう・はなそう会」一般参加者の内訳

未就学児				
年 齢	午前の部：12人		午後の部：10人	
	男児（人）	女児（人）	男児（人）	女児（人）
1歳未満	1	2	1	
1歳～2歳未満		1		2
2歳～3歳未満		1		
3歳～4歳未満	1	2	3	4
4歳～5歳未満		2		
5歳以上		2		
保護者				
	午前の部：8人		午後の部：12人	
	母（人）	7	7	7
父（人）	1		5	
合計（子ども＋保護者）	20		22	

3-2. 当日までの取り組み

当日に向けて、4年生の2つの授業「保育者論」「子育て支援」で取り組みを進めた。

「保育者論」（担当教員：大沼良子）は、保育者に求められる心構え、知識を再確認し、自身の保育者像（保育観）を描けるようになることを目指した学びを行う授業である。会の開催に向けては、保育・子育て支援における人的、物的環境のありかたについて学び、参加保護者も子どもが「今日、ここに来てよかった」という場所にするためにはどのような配慮が必要かについて考えた。例えば、今回のように初めて訪れる会の環境構成では、保護者と子どもの性急な分離はせず、保護者の見守りのもとに子どもたちが安心して自由に遊べるようにすること、子どもにとっての新規な場と家庭をつなぐものとして、家庭にもあるような玩具・絵本も置いておくことや、一方で保護者・子どもが初めて見るが子どもの興味に合った玩具や遊びを用意して、それらを子どもが自由に使えるようにすること、学生スタッフは子どもや保護者を優しく受け入れ応答することを心がけるということなどを、授業の中で考えた。また、この考え方に基づいて、当日の会場の環境構成案を考え、パネルシアター作品を制作、手作り玩具の教材などの準備も行った。

「子育て支援」（担当教員：丸谷充子）は、子育て家庭を取り巻く社会の状況を知り、保護者の主体的な子育てを支援する方法と関わりを学ぶ授業である。会の開催に向けて、子どもが自由に遊び、保護者はゆったり寛げる環境の設定、保育士の援助について、ディスカッションを重ねて準備をした。特に、子どもと保護者一人一人に寄り添うためにはどのようなことを心がけ、注意したらよいのかを考え、保護者と円滑に話をするために、保育者役、保護者役を決めてロールプレイによる演習を行った。さらに地域で親子が集う子育て広場を運営している専門職を招いて、子育て支援の実際、親子に関わる上での配慮について話を伺い、当日に向けて準備をした。学生は子どもを一人ずつ担当し、その行動に付き添い、見守ることとした。それによって、子どもの豊かな個性のあり方を知り、個々の特性にあわせてどのように関わっていくかを体験的に学ぶことを期待した。また保護者からの話も積極的に聴くことで、家庭内での子どもに対する思い、育児の実情を、より具体的に知ることができる。乳児から幼児までの異年齢の子どもが楽しめる環境設定を考え、自由遊びに用いる玩具を誤嚥・傷害予防の観点から選択、配置するための配慮も行った。

なお、2年生の「保育内容 表現」（担当教員：弓削田綾乃）の授業で、会場の装飾を担当し、安全に配慮しつつ季節にあった手作りの飾り付けを実施した。

授業間の連携や学生の共同作業等においては、おもにクラウド型教育支援システム（manaba）を用いて進めた。当日のスケジュールは、表2の通りである。

表2. 7/2「親子で参加 あそぼう・はなそう会」のタイム・スケジュール

午前の部の時間	午後の部の時間	内 容
9:30 ~ 10:00	13:00 ~ 13:30	入室
10:00 ~ 11:00	13:30 ~ 14:30	自由遊び ＜工作コーナー（紙コップの腕時計、けん玉制作）、壁のお絵描きコーナー、キッチンコーナー、電車コーナー、ブロックコーナー、パズルコーナー、絵本コーナー、乳児用コーナーなど＞
11:00 ~ 11:30	14:30 ~ 15:00	集団あそび ＜紙芝居、パネルシアター、歌と踊り・手遊びなど＞
11:30 ~ 12:00	15:00 ~ 15:30	アンケート記入、退室

表2にある通り、会場内には、自由に好きな遊びができる複数のコーナーを設置した。具体的には、腕時計やけん玉を手作りする工作コーナー、壁に貼った模造紙に絵を描くお絵描きコーナー、ままごとセットを並べたキッチンコーナー、木製レールを組み立てる電車コーナー、いろいろな形を作るマグネットブロックコーナー、木製のはめ込み式のパズルコーナー、絵本コーナーなどである。また、あらかじめ0歳の参加がわかっていたため、安全に休んだり遊んだりできる乳児コーナーも設置した。また、それぞれのコーナーが混在しないように、カラフルなウレタンマットを敷いてコーナーごとの区切りをつけた。学生は、実習時と同様にエプロンをつけ、清潔で安全な身だしなみで臨んだ。

3-3. 当日の様子

会場となる建物の入り口と駐車場に案内係が立ち、建物の9階へと誘導した。三々五々に来場する家族ごとに、受付で検温と消毒を実施し、担当の学生がプレイルームへ案内した。

子どもたちは会場に入ると、思い思いのコーナーに行き、好きな遊びを始めていた。いくつかのコーナーを順番に回る子どももいれば、同じコーナーで飽きずに遊び続ける子どももいる。学生は、自分が担当する子どもの興味関心をみながら、次の遊びに誘導したり、感染対策をしたりした。その一方で、初めての場所と人にとまどい、保護者から離れない子どももいた。学生は、どのような子どもにも無理な誘導はせず、同じ目線の高さで話しかけながら、安全に楽しめるように対応していった。すると、保護者と離れられなかった子どもも、同じ学生が相手をするので安心するのか、徐々に保護者から離れて遊ぶ姿がみられた。それは保護者も同様で、最初は子どもの隣や後ろにぴったりとついていていた保護者も、時間とともに子どもから離れ、遠くから見守っていた。また子どもを見守るだけでなく、壁際に置いた低めの椅子に座りながら、他の保護者や学生・教員と談笑する様子もみられた。

後半は、学生の声掛けで一か所に集まり、ペープサートや紙芝居、手遊びや運動遊びなどを楽しんだ。ペープサートや紙芝居は、学生が授業で制作したものである。なお、まだ自由遊びのコーナーで遊びたい子どもには集まることを無理強いせず、思い思いの欲求に添う対応をした。

最後は、感染対策のため、本来であれば全員で手をつないで行うところを、家族ごとで手をつなぐことにして、「さよならあんころもち またきなこ」の歌で終了した。そのあと、保護者にはA4用紙1枚分のアンケートへの回答を依頼し、回収した。また学生は、休憩時に簡単な振り返りを行った。

3-4. 保護者の感想

この会に参加して、自身の子どもに対する“気づき”があったかを尋ねたところ、次のような回答が得られた。

対人関係について、「人見知りしない」「親以外の大人とも遊ぶことができる」「かまってもらえるとにかくやか」や、逆に「集団では気後れして参加できない」ことがあげられていた。また、「自分のやりたい事を主張できる」ことに気づいたという回答もあり、子どもへの気づきがあったことがうかがえた。

学生の対応については、「自然に声をかけてくれて嬉しかった」「安心して子どもと遊んでもらえた」「笑顔で温かく接していただき、ステキな先生になりそうな方ばかりだと思った」「学生さんがとても気遣ってくれ、不安があったが助かった」など、子どもへの関わり方をみて、安心感につながったことが読み取れた。また、「わがままに付き合ってくれた」「子どもの意思を尊重して辛抱強くコミュニケーションをとってくれた」「子どものしていることに肯定的に関わっていた」など、子どもの個性や態度が受け入れられたことが信頼の元となったことがうかがえた。

さらに、「保護者の子育てに対する考えや環境にも興味を持ってくれてよかった」「保育の仕事などに向けて頑張っている様子が聞いてよかった」「大学時代にこのような経験ができることは、子どもの実態や様子がわかってとてもよいと思った」など、保育士養成課程を踏まえた取り組みに理解を示し、評価する声も聞かれた。

保護者自身のこととして、「いつも子どもにつきっきりだが、遊んでもらえて少しリラックスできた」「上の子を抱っこしたり、遊んだりできた」といった感想からは、本活動が保護者の心理的な支援になったことがうかがえた。

3-5. 学生の感想

参加した学生の感想を一部紹介する。

- ・パネルシアターや手遊びに興味を示す子もいればお気に入りの玩具で遊び続ける子もいたり、その姿は様々だった。興味を示しながらも行けずにいる子もいたため、子どもの様子を見て、その子の気持ちに寄り添った関わり方をすることが大切だと思った。
- ・子どもは親の見守りの中で安心して遊びに集中することができ、親はのびのびと遊ぶ子どもの姿を見ることで安心していたのを感じた。
- ・子どもたちが楽しそうに遊ぶ姿を見ていられることは、保護者にとってすごく嬉しいことだと感じた。
- ・保護者の方も最初は緊張しているのが感じられたが、プログラムが終わる頃にはたくさん話しかけてくれ、いろいろなことを教えてもらえてとても嬉しかった。
- ・子どもと過ごす・遊ぶことで疲れを感じている現状があると知った。忙しい日々の子育ての中で、少しの時間でもリラックスできる、息抜きができる時間があるということは大切だと感じた。
- ・2人以上子どもがいる保護者にとって、上の子との関わりをじっくり持つために下の子を誰かに見てもらうことの重要性を強く感じた。

会への参加を通して家族、親子や兄弟姉妹の自然な姿に触れ、保護者の子育ての喜びや葛藤、親の思いなどを聞いたことが、大きな学びになったと考えられる。

4. 地域交流活動② 8月20日（土）「夏の あそぼう・はなそう会」

4-1. 活動の概要

- ・実施時期：2022年8月20日（土）10:00～11:30
- ・実施場所：和洋女子大学南館プレイルーム
- ・時間：1時間30分程度
- ・参加者：
 - 学生：和洋女子大学家政学部家政福祉学科児童福祉コース4・3・2年生の希望者 計10人
 - 一般の方：和洋女子大学近在の未就学児（3歳以上児とその弟妹）と保護者（内訳は表3の通り）
 - 9家族（子ども15人＋保護者13人＝計28人）
 - *参加回数：7家族は2回目、2家族は1回目

表3. 8/20「夏の あそぼう・はなそう会」一般参加者の内訳

子ども15人		
年 齢	男児（人）	女児（人）
1歳未満	2	1
1歳～2歳未満		2
2歳～3歳未満	1	
3歳～4歳未満	1	5
4歳～5歳未満		
5歳以上	1	2
保護者13人		
母（人）	9	
父（人）	4	
合計（子ども＋保護者）	28	

4-2. 当日までの取り組み

授業の一環として取り組んだ第1回と異なり、夏季休暇中の第2回は希望学生と教職員で準備・実施した。それゆえ、第1回は学生が4年生のみだったのに対して、第2回は2・3年生にも呼び掛けて参加者を募り、4年生7人、3年生1人、2年生4人が手をあげた。その内、2年生2人は体調不良で不参加だったため、当日は10人の学生が参加した。情報共有や打ち合わせ等は、クラウド型教育支援システム(manaba)を活用し、当日を迎えた。

表4. 8/20「夏の あそぼう・はなそう会」のタイム・スケジュール

時 間	内 容
9:30～10:00	入室
10:00～11:00	自由遊び ＜工作コーナー（うちわ）、ヨーヨーコーナー、キッチンコーナー、電車コーナー、ブロックコーナー、パズルコーナー、乳児用コーナーなど＞
11:00～11:30	集団あそび ＜表現あそび（海の生き物に変身）⇒大きな紙にお絵描き＞
11:30～12:00	アンケート記入、退室

会場の設営は第1回を踏襲して、工作コーナーでは、丸い厚紙にシールを貼ったり絵を描いたりして作る「うちわ制作」をし、ヨーヨーコーナーではミニプールでヨーヨーをすくったり釣ったりといった、季節性を感じられる遊びを準備した。また、後半の集団あそびでは、からだを動かす表現あそびのあとの活動として、大きな紙に思い思いの絵を描くことを企画した。そこで、床に敷く3.6m×5.4mのビニールシートと、その上に広がるサイズの模造紙を用意した。また今回は、教員が保護者と積極的に関わることを企画した。

その他の準備・手順は、第1回と同様であるため、割愛する。なお、全国的に新型コロナウイルス感染症の感染が拡大傾向であったことを受けて、和洋女子大学の「COVID-19に対する事業活動の基準」にもとづき、感染対策を施しながら実施に至った。

4-3. 当日の様子

家族ごとに受付で検温と消毒を実施し、担当の学生がプレイルームへ案内した。子どもの人数が15人に対して学生は10人だったため、2歳以上児10人を学生が一人ずつ担当することとし、2歳未満児5人は、教職員が見守ることで対応した。9家族中7家族が2回目の参加であり、子どもたちにはある程度慣れた様子がみられた。今回は、比較的早い段階から、保護者と離れて遊ぶ様子がみられ、保護者も少し離れたところから見守ったり、子どもや学生と話しながら一緒に遊びに参加したりしていた。

また、教員との雑談から、子どもの心理発達、きょうだい関係（専門教員：丸谷充子）や食育（専門教員：池谷真梨子）に関する相談につながる場面もあった。相談内容の例は、「きょうだいを平等に育てることについて」「下の子どもが生まれた時の上の子どもの心理と対応について」や、「子どもがまもなく8か月だが、1日3回食にしてよいか」「離乳食を開始したばかりだが、ほうれん草を嫌がるのをどうしたらよいか」などだった。

後半は、教員と学生の協同で表現あそびを実施した。「海のいろいろな生き物に変身して、海の中を探検しよう！」というコンセプトで、魚やカニ、海藻、イルカなどをイメージしながら、身体表現を楽しんだ。最後に大きな柔らかい布を持ち出し、波に見立てて動かしたところ、その下をくぐったり、包まれたりするたびに、歓声があがっていた。そして、表現あそびで生じた「表現したい」という気持ちを、絵を描く活動につなげた。表現あそびの活動では周りで見えていた子どもも、床に敷き詰められた大きな模造紙を見ると、その上に乗って夢中で絵を描く姿が見られた。

最後は、前回同様に「さよならあんころもち またきなこ」の歌で終了した。そのあと、保護者アンケートを回収し、学生は、後日振り返りを提出した。

4-4. 保護者の感想

学生の子どもの関わりについては、「どの学生さんも子どもと同じ目線に立って遊んでくれて、安心して見守っていられた」「沢山のひとと交流が出来、お姉さんたちに遊んでもらえてとても嬉しそうだった」という、安心感があったことがうかがえた。

保護者自身のこととして、「子どもたちの世話で疲れ気味だったので、良いリフレッシュになった」「普段他の大人とお話しできないのでこういう機会は嬉しい」という感想があり、保護者の支援としての意味があったと考えられた。また、教員との関わりについて、「離乳食のこと、心理のことが専門家から聞けて嬉しかった。実践したい」「先生や学生さんと相談的にもっとお話ししたかった」という感想があった。気軽に話せる雰囲気は今後も必要であるだろう。

さらに、「前回から数日たっても「また行きたい」「次はいつ行けるの」と子どもが言っていた」「悩みを相談したり、学生さんたちと遊んでもらえたりする機会が定期的にあると助かる」という感想が複数あり、継続的な実施が、より有意義な支援につながると考えられた。

なお、「申込がインターネットでできてスムーズ」「リマインドメールも配慮があり安心した」などの運営に関する意見もあり、今後の参考にしたい。第2回は小規模だったものの、募集開始3日で定員に達し、申し込みを受け付けられない方も複数いたことから、開催方法についても再考していきたい。

4-5. 学生の振り返り

参加した学生の感想の一部を紹介する。

- ・ 保育者の言葉がけやリアクションで、子どもの新たな一面を発見することに繋がると思った。
- ・ 子どもだけでなく、保護者の方々の生の声を聞くことができたため、参加して良かった。
- ・ 先輩方と一緒に参加できたことで、子どもへの声かけの仕方などを学ぶことができた。
- ・ 先生方の親子との関わりを見て学ぶことができた。保護者も安心しているように感じられた。
- ・ 自分が学んだことを実践する機会になった。
- ・ 様々な製作の材料とお手本を準備し、子どもが自ら発想しながら製作が楽しめるようにしたい。
- ・ 今後も学生主体で新たな企画を考えて、子どもたちに楽しんでもらえる会を作りたい。
- ・ 楽しみにしてくれている親子のためにも続けていけたら良いなと感じる。

以上のように、子どもと保護者の自然な姿に触れ、関わり方を学ぶ機会になったとともに、大学で学んできた知識と技術の定着をはかる機会になったと考えられる。また、学年を越えて協働する活動が、学びの経験に応じた有意義な連鎖を生み出していると考えられた。「参加してよかった」「また参加したい」などの感想だけでなく、これからの活動に主体的に関わろうとする意識が醸成されているといえよう。

5. おわりに

和洋女子大学家政学部家政福祉学科児童福祉コースの一期生が4年生となる2022年度に、地域の未就学児・保護者たちと学生とが交流する場づくりをスタートすることができた。2022年9月現在、まだ2回の実施であり、成果をまとめるには至らないものの、現時点で見えてきた知見と課題をまとめると、次のようになる。

大学を拠点とした交流の場を形成するために、保育を学ぶ学生や教員らがどのように介入していくことが望ましいのだろうか。今回、学生が子ども一人ずつに付き添って見守る態勢にしたことで、学生は短時間でも責任をもって子どもと深く関われたとともに、家族の自然な姿に触れる貴重な機会になったと考える。一方、子どもと保護者にとっては、学生の態度が安心感を与えたことがうかがえた。安心の理由として、学生の専門的な学びにより培われた知識と技術、未熟ながらも真摯で謙虚な姿勢があったからと考えられた。

「あそぼう・はなそう会」は、子どもにとってはワクワクする遊びの場であるとともに、親ではない大人と関わる場であった。そして保護者にとっては、子どもと離れ、子どもへの気づきを得たり、心を休めたりできる場となっていた。それ以外にも、育児の話の共有、保護者同士の交流、教員との歓談・相談という場にもなっていたことがわかった。

今後、定期的開催するための課題としては、運営側のシステム構築が必要である。具体的には、長期的な計画、学生・教員の連携、広報活動、諸手続きや一般参加者への細やかな対応などが該当する。また、

家政福祉学科ならではの遊びの内容も検討していきたい。最後にマルチメディアの活用という点では、今回、情報共有やディスカッション、記録などにとどまった。今後の活動では、デジタルコンテンツを用いた内容も検討しつつ、子どもたちの反応を鑑みながら、マルチメディアの活用という課題にも取り組んでいく。

引用文献・参考文献

- 1) 弓削田綾乃, 丸谷充子, 佐藤有香, 大沼良子, 庄司妃佐, 二宮祐子, 池谷真梨子, 飯村愛, マルチメディアを用いた地域連携のプラットフォームづくり1～家政福祉を基盤とした保育士養成～, 和洋女子大学紀要. 2022, 第63集, p.199-204.

弓削田綾乃（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 准教授）
丸谷 充子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 教授）
大沼 良子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 教授）
庄司 妃佐（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 教授）
佐藤 有香（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 准教授）
二宮 祐子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 准教授）
池谷真梨子（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 助教）
飯村 愛（和洋女子大学 家政学部 家政福祉学科 助手）

（2022年11月15日受理）